

運動部の活動形態別にみた心理的特性の違いについて

塚 本 茂 博 (愛知教育大学大学院)

筒 井 清次郎 (愛知教育大学)

The differences in the Psychological Characteristics between participants in Clubs and Circles

Shigehiro TSUKAMOTO (Graduate Student of Education)

Seijiro TSUTSUI (Department of Helth and Physical Education)

1. 研究の目的

近年、生涯体育・スポーツの必要性を背景に、スポーツ参加に関する様々な研究がされている。スポーツ参加といっても参加者のタイプは様々である。毎日運動をする人もいれば、週に一回、あるいは年に数回のみ運動をするという人もいる。また、個人でジョギングをしたり、施設を利用してトレーニングをする人もいれば、学校や会社、あるいは地域のクラブに所属して運動をする人もいる。参加者をより効果的な活動へ導くため、その心理的特性を明らかにすることは重要である。

大学生のスポーツ参加について考えたとき、授業以外の主な参加の場として部活動及びサークル・同好会（以下同好会とする）の二つが考えられる。本学において部活動とサークル・同好会参加者の数をみると圧倒的にサークル・同好会参加者の方が多い。これは二つの活動形態における参加者の心理的要因に違いがあるためと考えられる。活動形態に着目した研究として上杉(1986)は、運動部所属、同好会所属及び非運動部所属という三つのカテゴリーを考え、価値意識について分析した。その結果、運動部所属者はスポーツに対する禁欲志向を示し、同好会所属者而非運動部所属者は即時志向を示すとされている。このことから同好会が運動部とは価値意識において異質な集団であることが明らかである。この二つの活動形態の参加者が、現在あるいは今後のスポーツ参加についてどのような考え方を持っているかを説明しようとした場合、有力なモデルとなるのがBundura(1977)

のself-efficacy modelである。このモデルでは、行動を規定する主要な先行要因として、二つの予期機能が重視されている。一つは、ある出来事あるいは行動によってどのような結果が期待できるかを表す結果予期、もう一つは自分が必要な行動を効果的に遂行できるかできないかという行動に関する可能性の認知を表す効力予期である。

このモデルを用いた先行研究（加賀ら；1993、筒井ら；1995）では、結果予期についての因子分析の結果から、自分にとってプラスの要因を予期する肯定的結果予期と、マイナスの要因を予期する否定的結果予期の二つを抽出した。また、効力予期については、自己効力感とも呼ばれるように、運動の実施・継続に対する自信と考えられることから運動に対する有能感と置き換えられていた。

以上の二つの要因の他に、部活動と同好会では志向性に違いがあると考えられるため、勝敗に対する態度も用いた。勝敗に対する態度（勝利志向性とレクリエーション志向性からなる）は、活動時間（同好会水準として1～6時間、一般的な部活動水準として7～12時間）によって、勝利欲求度が高まるとされている（岡沢ら；1981）。このことから、活動形態と重要な関わりを持つ心理的特性であると考えられる。

そこで本研究では、活動形態別に結果予期、運動に対する有能感（以下有能感とする）、及び勝敗に対する態度の三側面から分析し明らかにすることを目的とした。

2. 方 法

1) 対 象

愛知教育大学学生305名 部活動132名(男子73名, 女子59名)、同好会137名(男子71名, 女子102名)

2) 期 日

平成6年9月中旬～11月中旬

3) 研究の手続き

(1) 調査の方法

愛知教育大学の4つの部活動と、7つのサークルに対し、質問紙法による調査を実施した。種目は、部活動・同好会共にサッカー、バスケットボール、バレーボール、テニスの4種目であった。

表1 対象とした種目と人数

種目		部活動参加者数	同好会参加者数
サッカー	全体	30	15
	男子	30	15
	女子	0	0
バスケットボール	全体	41	34
	男子	21	17
	女子	20	17
バレーボール	全体	26	23
	男子	11	10
	女子	15	13
テニス	全体	35	101
	男子	11	29
	女子	24	72
合計	全体	132	173
	男子	73	71
	女子	59	102

(2) 調査内容

結果予期、有能感、勝敗に対する態度、について調査を行った。これらの項目の妥当性、信頼性は加賀ら(1993)の研究において示されているもので、本研究においてもこの尺度を流用する。

結果予期については、加賀ら(1993)の研究に基づき、今から新たなスポーツを始めたとして期待できることを、「上手くなれる」「体力を高められる」「気分転換やストレスの発散」「友人ができる」「チーム内で認められる」「楽しんでやれ

る」「健康の増進」「就職に有利」という肯定的な側面を8項目とし、それぞれ4段階評定したものの合計得点を肯定的結果予期待点とする。

一方、「すぐにあきてしまう」「やりたいことができなくなる」「金や時間の無駄」「自分には役に立たない」「負けたり失敗して嫌な思いをする」という否定的な側面を5項目とし、同様に4段階評定したものの合計得点を否定的結果予期待点とする。

運動に対する有能感については、加賀らの研究に基づき「仲間と仲良くやれる」「体力はある」「健康には自信がある」「運動は得意である」「何をやってもすぐ上手くなる」「運動が好きだ」「挑戦するのが好きだ」「運動を楽しめる」「活動的な方だ」という9つの項目を、同様に4段階評定したものの合計得点を運動に対する有能感得点とする。

勝敗に対する態度については、加賀らの研究に基づき「勝つことに意義」「勝ってこそ喜び」「スポーツの魅力は勝負」「勝ったときの感激は何者にもかえがたい」「悔しい思いをしたくないので是非勝とうと思う」という、勝つことに重点をおく勝利志向性を5項目とし、同様に4段階評定したものの合計得点を勝利志向性得点とする。

また、「ストレス解消」「余暇を楽しむため」「勝ち負けより楽しみ」「気のあった者同士で仲良く楽しく」「スポーツは純粋に楽しむもの」という、楽しみに重点をおくレクリエーション志向性を5項目とし、同様に4段階評定したものの合計得点をレクリエーション志向性得点とする。

4段階評定は、「4. 非常にそう思う」、「3. かなりそう思う」、「2. あまりそう思わない」、「1. 全くそう思わない」のいずれかを選ぶように指示を与えた。

3. 結 果

(1) 肯定的結果予期について

肯定的結果予期については表2に平均値と標準偏差、図1に平均値を示した。平均値では同好会より部活動の方が肯定的結果予期待点が高く、女

子より男子の方が肯定的結果予期得点が高い。そこで、2要因分散分析を行った結果、活動形態の違いにおいて1%水準で部活動の方が肯定的結果予期が高く、性差において0.1%水準で男子の方が肯定的結果予期が高いことが明らかになった(表2参照)。交互作用は認められなかった。

表2 肯定的結果予期の部・同好会別平均値と標準偏差

		平均値	標準偏差	人数
全体		22.82	3.24	305
部活	全体	23.46	3.35	132
	男子	23.90	3.08	73
	女子	22.92	3.61	59
同好会	全体	22.33	3.07	173
	男子	23.21	3.33	71
	女子	21.72	2.73	102

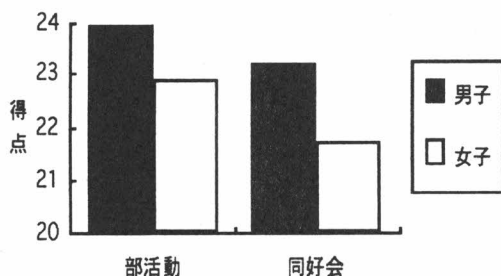


図1 肯定的結果予期の平均値

(2) 否定的結果予期について

否定的結果予期については表3に平均値と標準偏差、図2に平均値を示した。平均値では部活動より同好会の方が否定的結果予期得点が高く、男子の方が女子より否定的結果予期得点が高い。そこで、2要因分散分析を行った結果、性差において5%水準で男子の方が否定的結果予期が高いことが明らかになった。活動形態の違いにおいては有意な差が認められなかった(表3参照)。交互作用は認められなかった。

表3 否定的結果予期の部・同好会別平均値と標準偏差

		平均値	標準偏差	人数
全体		9.16	2.74	305
部活	全体	9.09	2.87	132
	男子	9.55	2.60	73
	女子	8.53	3.09	59
同好会	全体	9.22	2.64	173
	男子	9.51	2.76	71
	女子	9.02	2.55	102

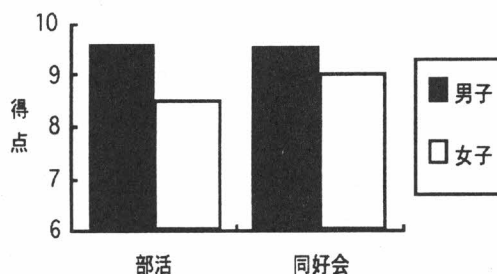


図2 否定的結果予期の平均値

(3) 運動に対する有能感について

運動に対する有能感については表4に平均値と標準偏差、図3に平均値を示した。平均値では同好会より部活動の方が得点が高い。また、同好会の女子は極端に得点が高い。そこで、2要因分散分析を行った結果、活動形態の違いにおいて0.1%水準で部活動の方が有能感が高く、性差において5%水準で男子の方が有能感が高いことが明らかになった。交互作用は認められなかった。

表4 有能感の部・同好会別平均値と標準偏差

		平均値	標準偏差	人数
全体		26.22	4.80	305
部活	全体	27.64	4.52	132
	男子	27.97	4.34	73
	女子	27.24	4.73	59
同好会	全体	25.14	4.75	173
	男子	26.10	4.86	71
	女子	24.47	4.57	102

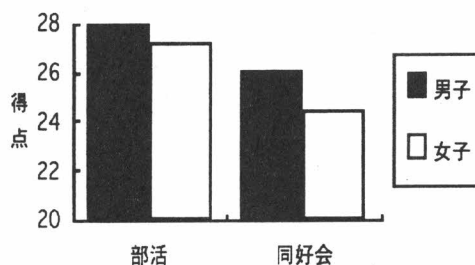


図3 有能感の平均値

(4) 勝利志向性について

勝利志向性については表5に平均値と標準偏差、図4に平均値を示した。平均値では同好会より部活動の方が勝利志向性得点が高く、性差は同好会においては女子より男子の方が勝利志向性得点が高い。そこで、2要因分散分析を行った結果、性差において5%水準で女子より男子の方が勝利志

向性が高く、活動形態の違いにおいて0.1%水準で、同好会より部活動の方が勝利志向性が高いことが明らかになった。

表5 勝利志向性の部・同好会別平均値と標準偏差

		平均値	標準偏差	人数
全体	全体	13.57	2.89	305
	部活	14.82	2.80	132
	同好会	12.61	2.58	173
部活	全体	14.82	2.80	132
	男子	14.84	2.92	73
	女子	14.80	2.66	59
同好会	全体	12.61	2.58	173
	男子	13.38	2.78	71
	女子	12.08	2.30	102

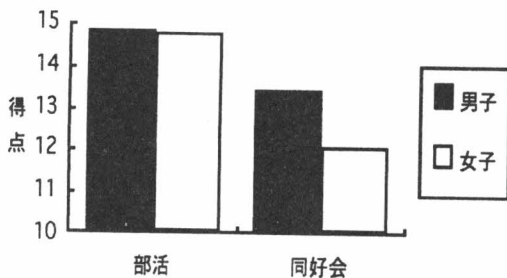


図4 勝利志向性の平均値

また、活動形態と性差において交互作用が5%水準で認められたため、ライアン・メソッドを用いて多重比較を行った(表7参照)。その結果、部活動男子と部活動女子については、有意な差は認められなかったが、同好会男子は同好会女子より5%水準で、有意に勝利志向性が高いことが認められた。よって、同好会においてのみ男子の方が女子より勝利志向性が高いことが明らかになった。

(5)レクリエーション志向性について

レクリエーション志向性については表6に平均値と標準偏差、図5に平均値を示した。平均値では、部活動より同好会の方がレクリエーション志向性得点が高く、性差はみられなかった。そこで、2要因分散分析を行った結果、活動形態の違いにおいて0.1%水準で同好会の方が部活動より、レクリエーション志向性が高いことが明らかになった。性差においては有意な差が認められなかった。また交互作用は認められなかった。

表6 レクリエーション志向性の部・同好会別平均値と標準偏差

		平均値	標準偏差	人数
全体	全体	13.90	2.26	305
	部活	13.14	2.25	132
	同好会	14.50	2.09	173
部活	全体	13.14	2.25	132
	男子	13.16	1.99	73
	女子	13.10	2.56	59
同好会	全体	14.50	2.09	173
	男子	14.35	2.31	71
	女子	14.60	1.93	102

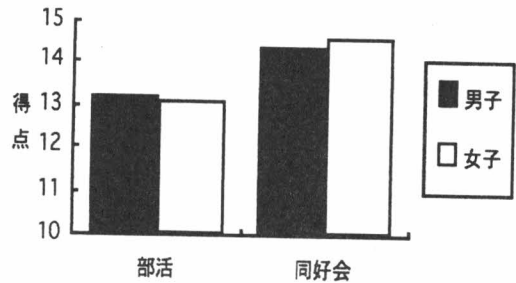


図5 レクリエーション志向性の平均

表7 有意差検定の結果

項目	主効果		交互作用
	活動形態	性	
肯定的結果予期	部活動>同好会 p<0.01	男子>女子 p<0.001	n.s.
否定的結果予期	n.s.	男子>女子 p<0.05	n.s.
有能感	部活動>同好会 p<0.001	男子>女子 p<0.05	n.s.
勝利志向性	部活動>同好会 p<0.001	男子>女子 p<0.05	同好会男子>同好会女子 p<0.05
レクリエーション志向性	同好会>部活動 p<0.001	n.s.	n.s.

4. 考 察

授業以外のスポーツ活動を実施している大学生の中で、部活動に所属して活動している者と、サークル・同好会に所属して活動している者を比較した。

(1)活動形態について

部活動参加者は同好会参加者よりも肯定的結果予期が高く、否定的結果予期が低い。部活動参加者は、新たに運動を始めても良い結果が得られやすく、良くない結果は得られにくいと考えており、また運動に対する有能感も高い。ある行為が良い結果をもたらすだろうということは確信できても、そうした行為を自分がうまくやり遂げられるかど

うかは自信がもてないという場合がある。これは結果予期は十分に高いが、運動に対する有能感が低いということになる。両者が共に高い時、積極的にスポーツに参加することが考えられる。このことから部活動参加者は、新たに運動を始めたとしても積極的に参加すると考えられる。

また、筒井ら(1995)は、今後運動実施を積極的に希望するか、消極的になるかの差異は、スポーツによって良い結果が得られると思っているか、良くない結果が得られると思っているかによるとしていることから、部活動参加者は、今後も積極的にスポーツに参加することが考えられる。

勝敗に対する態度については、部活動参加者の方が同好会参加者よりも勝利志向性が高く、レクリエーション志向性が低い。このことから、部活動参加者はスポーツにおいて勝つことを重視し、同好会参加者は楽しみを重視しているといえる。部活動参加者は、競技成績が不振な状態が続くと、スポーツ参加に対するモチベーションが下がる恐れがあり、一方同好会参加者は、チーム内での友人関係が上手くいかなかったり、あるいはチームの方針が勝利を重視する方向に向かったりして、スポーツを通して楽しみを十分に得られなくなるとスポーツ参加に対するモチベーションが下がる恐れが考えられる。

以上のように大学生のスポーツ参加において、部活動に所属するかあるいはサークル・同好会に所属するかを決める要因として、結果予期、有能感及び勝敗に対する態度が影響していることが考えられる。

(2)性差について

肯定的結果予期及び有能感については、部活動参加者、同好会参加者共に、男子の方が女子よりも高い。これは、男子の方が女子よりも、スポーツによって良い結果を得られやすいと考えており、また運動能力的に優れていると感じていることを示している。

一方否定的結果予期については、部活動参加者、同好会参加者共に、男子の方が女子よりも高い。江刺(1982)は、スポーツ参加に関する性差の検討で、女子はスポーツについて伝統的にいわれている観念的なことなどに肯定的であるとしており、

女子が男子よりも「スポーツはためになる」と観念的にとらえていたと考えられる。

勝利志向性については、部活動参加者では性差がなく、同好会参加者では男子の方が女子よりも高い。これは、部活動と同好会の競技水準の差が影響していると思われる。飯島(1982)の競技水準と価値志向の関係についての調査で、男子は競技水準による価値志向の差はないが、女子は競技水準が低い場合は、勝利ではなくフェアを重視し、競技水準が高くなると勝利を重視するようになるとしており、本研究においても、部活動の方がサークル・同好会よりも競技水準が高いため、女子の価値志向に差がでたと考えられる。

5. 結 論

- (1)部活動参加者の方が、同好会参加者よりも、また男子の方が女子よりも肯定的結果予期、運動に対する有能感共に高い。
- (2)否定的結果予期については、女子の方が低い。
- (3)部活動参加者の方が、同好会参加者よりも勝利志向性が高く、逆に、レクリエーション志向性は、同好会参加者の方が部活動参加者よりも高い。また、同好会では男子の方が、女子よりも勝利志向性が高く、部活動では差がみられない。

引用・参考文献

- 1)江刺正吾(1982)「スポーツ参与の社会化にみられる性差の検討」
体育・社会学研究 1 同和書院 P152-156.
- 2)飯島俊明(1982)「学校運動部のスポーツに対する態度」
体育・社会学研究 1 同和書院 P117-135.
- 3)石井源信、古屋正俊、岩本良祐(1987)「体育・スポーツに対する態度および志向性を規定する要因分析(2)」東京工業大学人文論.
- 4)加賀秀夫、石井源信、杉原隆、深見和男(1993)「中高年のスポーツ参加に関する社会学的・心理学的研究第2報」平成4年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告.
- 5)加賀秀夫、石井源信、杉原隆、深見和男、杉山

- 哲司, 筒井清次郎(1994)「青少年のスポーツ参加に関する研究第1報」平成5年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告.
- 6)宮下充正、武藤芳照(1986)「高齢者とスポーツ」東京大学出版会 P87-94.
- 7)祐宗省三、原野広太郎、柏木恵子、春木豊(1985)「社会的学習理論の新展開」金子書房 P55-136.
- 8)上杉正幸(1987)「大学生の価値意識のパターンとその関連要因の分析」体育・社会学研究6 同和書院 P195-211.